

# かしはら



かしはら  
第171号  
平成29年  
紀元2677年

- ・神武天皇陵と橿原神宮―明治期の原風景―
- ・神社における人生儀礼／橿原だより
- ・祭典・行事報告
- ・大正期の橿原神宮をみる
- ・今後の祭典・行事／催事の御案内

## 過去から学び指標とする

「稽古」という言葉を耳にすることが無くなりましたが、不思議なもので我国古来の習い事などでは今でも「稽古」と言い、「勉強」や「練習」という言葉では言い表すことはありません。意味を引けば「稽古」は「古を稽える」とあり、この「稽える」とは「考えを居つくところまで巡らせる」と示されています。『古事記』序文でも、「莫不稽古、以繩風猷於既類、照今以補典教於欲絶（いつの時代にあつても、古いことをしらべて、現代を指導し、これによって衰えた道徳を正し、絶えようとする徳教を補強しないということはありませんでした）」と記されており「稽古」という言葉を見ることが出来ます。これは太安万呂の文章ですが、このような「過去を突き詰めて考え、今に照らし指針とする」という姿勢を古来より我が国では「稽古照今」と言い習わされて参りました。

さて、此度の社報「かしはら」はこの「稽古照今」の意を込めて、これからの百年のために、約百年前の大正期の橿原神宮について頁の許す限りでまとめさせていただきます。

上の写真は、大正四年（一九一五）の参道風景で現在の二の鳥居付近にあたります。橿原神宮が創建された明治時代の参道は、拜殿まで一直線に伸びておりましたが、大正期に行われた拡張工事の一環により参道を新たにし、現在の参道の原型が出来上がります。写真中央の大鳥居も同時期に建造されたものです。鳥居用材の一部を畝傍駅より在郷軍人百五十名が神宮前まで運搬したとの記録が残っております。

また、この号では古を振り返る試みとして、成城大学外池昇先生に「神武天皇陵と橿原神宮―明治期の原風景―」と題して御寄稿賜りました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

### 大正4年の参道風景

この年に大鳥居が建造され、神橋が架け替えられた。  
また、当時は鳥居に対して北西に参道が敷かれている。





成城大学教授 外池昇

慶応三年十二月九日の「王政復古の大号令」は、新たな政治の方向性を明確にしたものとよく知られているが、「撰関・幕府等」を「廢絶」とともに仮に「総裁・議定・参与」を置くといった具体的な規定とともに、「諸事神武創業ノ始<sup>もと</sup>二原<sup>と</sup>」<sup>もと</sup>くといわば理念を示す文言をも有することには注意が向けられなければならない。明治期における神武天皇の位置はここに極めて明確である。

本稿では、幕末期から明治三十年代頃までの時期に焦点を当てて、神武天皇陵と橿原神宮、そしてその周辺に蟠集した人びとの動向をみることにしたい。

さて、まずは神武天皇陵である。歴代天皇の陵の多くは、決してすべてではないが、江戸時代には当時の基準によつてそれなりに判然としており、神武天皇陵も大和高市郡四条村(奈良県橿原市)の塚山がそれとされていた。しかしこの四条村の塚山の神武天皇陵の場合は、それがそのまま明治期に受け継がれたのではない。「王政復古の大号令」を四年遡る文久三年二月十七日の孝明天皇の「御沙汰」によつて、同郡山本村(奈良県橿原市)の神武田(ミサンザイ)が新たな神武天皇陵とされたのである。その後神武田には神武天皇陵に相応しいだけの威容を備えるべく大規模な普請がなされ、同年十一月二十八日には勅使柳原光愛が遣わされて陵域の修成の奉告、次いで御拜がなされた。まさに「新された神武天皇陵の姿がそこにはあったのである」。

それでは、その新たな神武天皇陵は、人びとにどのように受け入れられたのであろうか。

そのことを考えるために、ここでは奥野陣七という人物に注目することにしたい。奥野陣七は天保十三年八月八日に大和国葛上郡橿原村(奈良県御所市)に生れ、幕末の動乱を勤王方の下役として過ごしたが、その後における自らの不遇をかこつ中で次第に関心を「古蹟」に向けようになり、明治十二・十三年には神武天皇陵門前に居を移して神武天皇陵尊崇を標榜する結社として報国社を主宰した。その報国社は、神武天皇陵を描いた『神武天皇御陵真景』等の刷物や奥野陣七自身が著した『皇朝歴史』(明治十九年)等の書籍を発行しつつ、

神武天皇陵への参拝者の誘引に尽力した。同様の結社は他にもあった。新海梅麿による畝火教会等はその例である。

奥野陣七は神武天皇陵尊崇のための事業と同時に、神武天皇が営んだ橿原宮旧址の探索に ついてもよく実地調査を展開し、宮址決定を促す請願をめぐって中心的な役割りを果たした西内成郷をよく助けたという。菟田茂丸<sup>うだのみわら</sup>著「橿原の遠祖」昭和十五年、平凡社、平成十八年復刻、橿原神宮本殿遷座祭祀記念)が「奥野陣七は橿原宮址に関する多年研究の結果を西内成郷に告げ、其の御聖蹟の顕彰方を相談に及んだやうであります」とする通りである。

かくて宮址は宮内省によつて買い上げられ、その後同地には神武天皇と媛蹈躰五十鈴媛皇后を祭神とする橿原神宮が創建されるに至った。つまり、明治二十二年七月には明治天皇より京都御所にあった内侍所(賢所)が本殿として下賜され、明治二十三年三月には官幣大社に列せられ、同年四月二日には橿原神宮で御霊代御奉納告祭があった。そしてその翌三日には神武天皇陵において神武天皇例祭が行なわれたのである。国家神道による神武天皇尊崇がここに本格化したのである。

橿原神宮の創建は、神武天皇陵周辺にあった数々の結社に大きな影響を及ぼした。神武天皇陵と橿原神宮は至近の距離であり、しかも神武天皇は橿原神宮の祭神である。こうなってみれば、当初は神武天皇陵への参拝者を当てこんだ結社であっても、神武天皇陵のみならず橿原神宮への参拝者をも取り込もうとするようになることは至つて自然な動向というものである。そしてこれを機会に、奥野陣七は報国社を畝傍橿原教会と改めたのである。つまり、教派神道の一派大成教に畝傍橿原教会を置くことが奈良県知事税所篤によつて明治二十二年十月十六日に認可され、同日付で畝傍橿原教会の規約・会則が定められた。

以降奥野陣七は畝傍橿原教会の会員募集に邁進した。同会の規則・会則による限り畝傍橿原教会は全国規模の組織が想定されている。従つて会員募集も広範囲に及んだ。管見の限りでも、地元奈良県をはじめとして兵庫県・岐阜県・山梨県の旧家の古文書には畝傍橿原教会の会員証の類や出版物をみる事ができる。会員募集の成果といえよう。ここでその例を挙げれば、書籍としてはすでにみた『皇朝歴史』の他、神武天皇の治世等について記した『神武天皇御記』、陵墓や宮址、官国幣社の一覽を載せた『歴代御陵墓参拝道順路御宮址官国幣社便

「等」が、刷物としてはすでにみた「神武天皇御陵真景」の他、神武天皇陵域内の埋碑の碑文の拓本を擬した「神武天皇御陵御修繕之際内埋碑文石摺」、皇祖神と歴代天皇を一覧にした「皇祖天神歴世皇靈略遙拝之巻」等がある。奥野陣七の面目躍如といったところであろう。

会員になると「神武天皇御陵真景」等の刷物を受け取ることができたり、神武天皇陵を参拝に訪れる際には然るべき待遇がなされたりするが、もちろん会員は会費を納める。つまりは、新たな会員の獲得こそが畝傍檀原教会の生命線なのである。そうしてみれば、畝傍檀原教会にとっては、神武天皇陵また檀原神宮の門前の他の結社はすべて競争相手である。何しろ会員数の多寡はそのまま各結社の財政に直結する。会員募集も次第に熱を帯びてきたものになって当然である。次に述べるのは、そのような会員募集競争の中での出来事である。

明治二十四年二月に、次のような問い合わせが畝火教会会長新海梅麿から檀原神宮社務所にあつた。畝傍檀原教会は同会が発行する鑑札を持参して檀原神宮に参拝すれば内陣に参入できると言っているがそうなのか、というのである。檀原神宮ではもちろんそのような対応はしていない。そもそも、檀原神宮と畝傍檀原教会とは無関係である。

また、明治二十七年六月には左の通りの「上申」が畝傍檀原教会から檀原神宮に提出された。檀原神宮の神符を畝傍檀原教会が一手に申し上げて各府県同教会の信徒に限って授与したい、というのである。しかし、翌明治二十八年一月十四日に『大阪朝日新聞』に檀原神宮では神符は神前以外では配らない旨の広告を出すことが指令されている。つまり、そういうことはしないというのである。

このほかの出来事も含めていくつもの事柄が、檀原神宮と畝傍檀原教会の間には横たわっていた。しかしその反面、畝傍檀原教会は檀原神宮の祭典に際しては積極的に協力している。例えば、明治二十七年四月二日の「私祭」には「競馬」「煙火」「花火」が、明治二十八年五月五日には「能楽」が、明治三十一年四月二・三日には「煙火」が奉納されている。

しかしそのような檀原神宮と畝傍檀原教会との多面的な関係も、やがて終焉を迎える時が来た。明治三十五年十二月二十六日に奥野陣七は「有罪ノ宣告」を受け、翌明治三十六年二月十六日には奈良県知事寺原長輝によって畝傍檀原教会の認可が取り消されている。その理由は「不正ノ所為アリ、公安維持上差支候」というものであった。なおこの際、畝傍檀原教会と

同じく大成教に属し松本弘道が主宰する畝傍太祖教会も認可が取り消されている。ちなみにすでにみた畝火教会は、会長であった新海梅麿の没後継承者がなかったという。

その後、奥野陣七は大阪に移り薬品業を展開するなどしていたが、大正十五年九月七日に亡くなった。

さてここで、これまでみてきた事柄について振りかえることにしたい。この一連の過程はひと言でいえば、檀原神宮と畝傍檀原教会は、それぞれ国家神道と教派神道の立場から神武天皇への尊崇を体現する存在として共存していたものが、次第に国家神道による神武天皇への尊崇に収斂されてゆく過程と捉え直すことができると思われる。

今日では神武天皇陵や檀原神宮の付近は、畝傍山・檀原公苑・奈良県立檀原考古学研究所附属博物館等に囲まれた荘重な雰囲気漂う一帯となっている。それと同時にここに至るまでには、文久三年二月の孝明天皇の「御沙汰」以来、右にみた通りの経緯があつたのもまた事実である。

本稿では紀元二千六百年を迎える際の動向等には言及できなかったが、その前段階のいわば神武天皇陵・檀原神宮、そしてその周辺の原風景といったものを追いかけて、ペンを走らせてきた。不十分な点もあると思われる。各位の御教示、御寛恕を乞う次第である。

### プロフィール

外池昇(といけのぼる)  
成城大学文芸学部教授 博士(文学)

昭和六十二年成城大学大学院文学研究科日本常民文化専攻博士  
(後期)課程単位取得修了

### 著書

- 『幕末・明治期の陵墓』(天皇陵の近代史)
- 『事典陵墓参考地』(吉川弘文館)
- 『天皇陵論』(新人物往来社)
- 『天皇陵の誕生』(祥伝社新書)
- 『検証天皇陵』(山川出版社)

### 監修

『文久山陵図』(新人物往来社)

七歳までは神の子―七五三について―

七五三とは、男女児に晴れ着を着せ、子供の年祝いをする古くからの人生儀礼の一つです。一般的に十一月十五日が七五三祝いの日として広まった理由は、五代将軍徳川綱吉の子・徳松の祝いがこの日に執り行われた事が始まりと言われています。身体が病弱であった吉綱の子・徳松が無事に五歳を迎える事ができた当時は大変喜ばしく感慨深いものであったでしょう。いつの時代も子供が無事成長することは親にとって何よりの願いでした。

昔の人々は七歳までは魂が安定せず子供は神の手のうちにあると考え、「七歳までは神の子」という思想を持っていました。そこで子供の成長の節目と考えられる三歳・五歳・七歳に儀礼が行われるようになったようです。

◆髪置（男女児三歳）…乳児の時に剃っていた髪を、いよいよ伸ばし始める儀式

◆袴着（男児五歳）…子供が生まれて初めて袴をつける儀式

◆帯解（女児七歳）…小袖の両襟の先に縫い付けられた二本の紐を取り去り、衣服の脇をふさいで初めて帯を締める儀式

また、人間は肉体と靈魂の結びついた存在と考えられていました。その様な思想の中で、生まれたばかりの子供は生命力が弱く、その魂は肉体から離れやすいものとされ、肉体と魂を安定させる為に様々な儀礼が出席直後から行われました。

檀原神宮では今年も十月から七五三祈禱が始まります。先に述べた様に十一月十五日がお祝いの日とされていますが、当日に限らずその前後でお詣りいただき、御家族でお子様の成長をお祝い下さい。

神前神楽奉納

まだ肌寒さが残る三月六日、檀原神宮内拜殿において、神社音楽協会様・大神神社様・檀原神宮による神前神楽奉納が執り行われました。この度の神楽舞は神武天皇二千六百年記念として奉納され、神社音楽協会の皆様には、神武天皇が即位されて二千六百年の年にあたる昭和十五年に作舞された「浦安の舞」を、大神神社の皆様には崇神天皇ゆかりの「磯城の舞」を御奉奏いただきました。檀原神宮は「扇舞」を奉奏致しました。

「扇舞」は明治天皇が明治四十二年（御年五十八歳）に詠まれた御製で作舞され、御祭神である神武天皇が檀原の地で国の基礎をお築きになって以来、我が国は少しも揺るがないことであると詠まれたもので、例祭や月次祭等、当神宮の祭典で最も多く奉奏されています。御神前で一度に複数の神楽舞が奏される機会は大変珍しく、神武天皇二千六百年を締めくくるに相応しい祭典となりました。



神社音楽協会の先崎先生と共に  
(檀原神宮)



「磯城の舞」  
(大神神社)



「浦安の舞」  
(神社音楽協会)



「扇舞」(檀原神宮)

祭典・行事報告

● 紀元祭（二月十一日）

御祭神である第一代天武天神天皇の御即位を讃え、国家の平安を祈念する紀元祭が斎行されました。本年は御勅使として掌典 十時和孝様を御差遣賜り、全国より約四千名の崇敬者の御参列のもと厳肅且つ盛大に執り行われました。

● 「奈良まほろば館」で展示・講演会

奈良県の特産品販売や観光情報を発信する「奈良まほろば館」（東京・日本橋）で、三月下旬から約二週間「橿原神宮〜ようこそ、日本のはじまりへ〜」と題した展示を行いました。会場では橿原神宮を上空から撮影した映像をはじめ、祭典や神武東遷を御紹介するパネル等で橿原神宮の魅力を紹介致しました。

また、期間中の土日には当神宮権宮司 西野敬一による講演会を開催。世界にも誇れる悠久の歴史を持つ国・日本と、そのはじまりの聖地である橿原をテーマとした講演に参加の皆様は真剣に耳を傾けていらっしゃいました。反響も大変良く好評のうちに閉会致しました。

● 奉納竹アート「金鶏」

毎年恒例となった橿原市主催の一大イベント「春の神武祭」。メイン会場となった橿原神宮ではコンサートや伝統芸能奉納が行われました。その中で



神武東遷パネル展示



映像や立体物を交えて御紹介



西野権宮司による講演風景

も特に目を引いたのが外拝殿前に展示された竹アート。この幅十二メートルにも及ぶ巨大な作品は作家三橋玄氏によるもので、橿原神宮の瑞鳥である「金鶏」をモデルとして制作されたものです。

金鶏は神武天皇が敵方に苦戦を強いられたい際、突如飛来し神武天皇の弓にとまり、その稲妻の様な光で敵方を眩惑させたと伝えられています。作品は夕刻になるとライトアップされ、まさしく光り輝く金鶏そのものでした。

● 御鎮座記念祭（四月二日）

明治二十三年四月二日に橿原神宮が御鎮座された事を記念して、午前十時より祭典が斎行されました。

● 神武天皇祭（四月三日）

御祭神 神武天皇が崩御された日に執り行われ、御祭神の御聖業を讃える祭典です。祭典では宮司祝詞奏上の後、昭和天皇の御製に元宮内省楽長 多忠朝氏により作舞・作曲された「浦安の舞」が、また祭典後は、奈良県指定無形民俗文化財に指定されている「国栖奏」がそれぞれ奉奏されました。

● 昭和祭（四月二十九日）

昭和天皇の御遺徳を讃え、皇室の弥栄と国民の隆昌、世界の平和を御神前に祈念し、御聖業を広く世に伝える昭和祭が斎行され、約三百名の崇敬者の御参列をいただきました。内拝殿前の外院齋庭では御祭神と縁の深い「久米舞」が奉奏されました。



ライトアップされた「金鶏」



浦安の舞



久米舞

## 大正期の檀原神宮をみる

去る平成二十八年は神武天皇が崩御されて二千六百年という式年であり、神武天皇二千六百年大祭が厳粛かつ賑々しく齋行された。平成三十二年、檀原神宮は御鎮座百三十年を迎えることになる。今よりおよそ百年前の大正期も神武天皇二千五百年祭が齋行された。ここで大正期の檀原神宮の推移を記し、当時の神武天皇に対する人々の崇敬の念を見つめることとする。

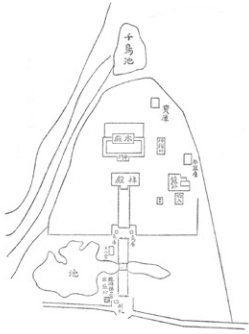
明治四十四年、檀原神宮創建に尽力した第四代西内成郷宮司の逝去により同年四月、桑原芳樹が第五代宮司に着任する。(拜命時は大神神社宮司兼務。翌年より檀原神宮専任となる。)しかしながら当時の檀原神宮は創建して日が浅く、財政面で困窮を極め、設備が整っておらず、平素の修繕も行き届いていない状態であった。そこで桑原宮司は神威の尊厳を保ち、霊域の神聖を保持するために尽力した。大正期における檀原神宮の神域拡張・施設整備はこの時から本格化する。

### 大正期の神域拡張に関する事業費

檀原神宮の崇敬者団体である講社は、畝火教会や畝傍檀原教会等の団体があった。しかし、各団体は檀原神宮から独立しており、明治四十五年檀原神宮による独自の「檀原神宮講社」を組織することとなった。講社設立時の名簿には賛成員として、後の元帥海軍大将である東郷平八郎、日本資本主義の父と称される渋沢栄一、後の第二十代内閣総理大臣である高橋是清など幅広い著名人が名を連ねている。講員は年々増加し、大正元年より同年十三年末までに七万三千四百九十九人に上り、多くの浄財がもたらされた。

また、明治四十五年二月二十二日付で内務大臣原へ敬宛に出された神宮規模拡張費への国費支出願に、大正四年から同年九年までの六カ年度に渡って内務省より費用が出された。さらに同九年の追加増額願では、翌年に内務省より追加下付があった。

その後、大正十一年の第四十五回帝国議会において



明治 38 年 9 月 11 日現在

益々の神威発揚のため神域拡張が計画されたが、同十二年の関東大震災により国庫支出は中止となった。

### 大正期の境内地整備事業

大正三年に林苑整備を担当した折下吉延は、神門を入ると畝傍山を背景とした本殿、拜殿が現れるよう表参道の導線設定を行い、神宮の森厳さを可視化する造園計画を実施した。

大正四年三月、現在の南神門あたりに平唐破風素木造の神門が建造された。現在、神門は紀元二千六百年奉祝会事業で移設され北神門となっている。

また、表参道に台湾檜を用いた神明造島木形の大鳥居を建造した。現在この場所には紀元二千六百年奉祝会事業のひとつとして建造された明神造の第二鳥居が立っている。

大正六年、当時の参道を進んでいくと大鳥居東南に並び立つようにして大石灯籠一基が奉納された。この大石灯籠は大正十四年に現在の表参道神橋の北側に移設されている。設計は社寺建築の権威である日本建築史学の創始者・伊東忠太である。ここで伊東忠太についてふれておく。

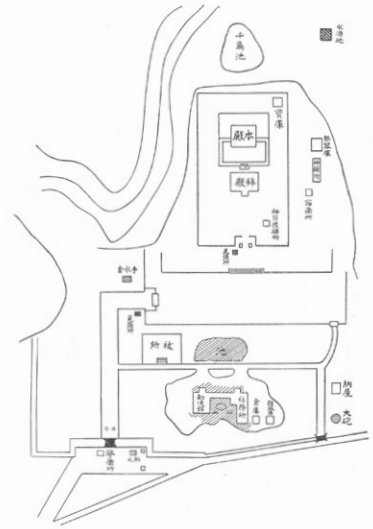
伊東は山形県米沢に生まれ、明治二十八年に東京帝国大学教授になる。明治神宮の創建構想から携わり、明治らしい新技術をもって社殿を創建するべきであるという意見が多い中で、祭祀を尊重した。伊東は、もし今までにない新しい様式で明治神宮が創建されたのなら、それに合わせて祭祀を変更しなければならない。祭祀を変更することは神道の根本的信仰を変えてしまうことになると考えた。そして「信仰の建築」としての明治神宮を完成させたのである。後に紀元二千六百年奉祝評議委員会職員に任命され、明治神宮等での経験を踏まえて檀原神宮造営に大きく携わっていくことになる。

大正十四年には手水舎が完成し、表参道が整備され社号石標が移設された。現在、手水舎は南神門付近にその名残を残し、社号石標は北参道入口に移設されている。

### 紀元祭、勅使参向初例

明治二十三年の創建以来、紀元節大祭(現紀元祭)へ未だに勅使参向が叶わぬ事に対して第五代桑原宮司は大正四年十二月一日付で内務大臣宛に紀元節に勅使参向を要望する建議書を提出した。諸々の事情から容易に行われず翌五年の紀元節には奉幣使代理として奈良県内務部長が奉仕している。しかし同年の四月三日、大正天皇並びに貞明皇后が神武天皇陵での

神武天皇二千五百年祭御親祭の後に橿原神宮に御親拝され、この年は多くの皇族が参拝されたのである。



大正14年4月～15年

この流れを受け大正五年に着工した勅使館、齋館、社務所が同六年六月に完成した。現在も勅使館、齋館は当時のまま使われているが、社務所の機能は昭和十四年に建てられた新社務所へ移って現在に至っている。そして念願叶い、橿原神宮が勅祭社に治定されたのは大正六年二月五日であり、同年の二月十一日の紀元節にて初めて勅使参向のもとで祭典が執り行われた。これは今からちょうど百年前の出来事であり、橿原神宮は勅祭社治定の節目を迎えたことになる。

### ● 大正期の橿原神宮周辺

参拝者数は大正一、三年まで一カ年六万人に過ぎなかったが同九年には約八十五万人に激増した。また、大正三年に上本町・奈良間を開通させた大阪電気軌道株式会社（現近畿日本鉄道株式会社）は畝傍線（現近鉄橿原線）を敷設し、同十二年三月に橿原神宮前駅（旧駅）を開業させた。さらに同年十二月には吉野鉄道（現近鉄吉野線）も橿原神宮前駅に乗り入れた。

増加し続ける参拝者の数と、鉄道敷設により周辺に商店等が立ち並び俗化の兆候が現れ始めたので、その対応として大正十一年にさらなる神域拡張が計画されたが、すでに述べたとおり関東大震災により中止となった。そこで、奈良県は拡張用地の一部に運動場を中心とした公園の設置を計画し、橿原神宮がその費用を寄付することで大正十五年神宮外苑としての性格を備えた県営畝傍公園が竣成した。

### ● 後期の教化活動

桑原宮司が皇典研究・神職養成機関である皇典講究所に転じ、在職一カ年の第六代吉田豊宮司を経て、菟田茂丸が第七代宮司に着任する。

神徳宣揚として大正五年から十三年までに十一種類、合計四十七万八千二百部の刊行物を発行し、その多くは菟田宮司が記した。

また神武東遷の目に見える形にするため、大正十二年に現在宝物館に展示してある金銅装頭椎太刀を購入した。頭椎太刀は『古事記』、『日本書紀』において、神武天皇率いる皇軍が忍坂で八十梟師を討つ場面でも見られる。大正後期は神域を拡大しつつ、神道教化にもいっそう力を入れた。

### ● 結び

こうして明治四十四年八月から大正十五年三月に至る約十五年の大規模造営事業は一先ず終結する。

大正期の橿原神宮は鎌倉時代に制定された『御成敗式目』第一条の条文「神は人の敬により威を増し、人は神の徳により運を添う」をそのまま体現した時代であった。橿原神宮における大規模改修は昭和十三年から十六年にかけての紀元二千六百年奉祝会事業だけではない。大正期からも御神威の益々の発揚を願い、神域の拡張や社殿修繕事業を行い、教化活動に努めたのである。その延長線に紀元二千六百年奉祝会事業があり、現在があり、そして未来があるのである。

### 参考文献・資料

- ・橿原神宮 、『橿原神宮史 卷一』（昭和五十六年）
  - ・橿原神宮 、『橿原神宮史 卷二』（昭和五十六年）
  - ・「桑原芳樹翁伝」刊行会『桑原芳樹翁伝』（昭和五十一年）
  - ・藤田大誠・青井哲人・畔上直樹・今泉宜子編『明治神宮以前・以後―近代神社をめぐる環境形成の構造転換』（平成二十七年）
  - ・大丸真美「伊東忠太の明治神宮社殿構想―神社建築観の推移―」『明治聖徳記念学会紀要「復刊第四十三号」』（平成十八年）
  - ・高橋知奈津「奈良県の近代和風造園」（平成二十二年）
- <http://repository.nabunken.go.jp/dspace/handle/11177/476>

今後の祭典・行事

- 十月 三日 秋季大祭  
十七日 神嘗奉祝祭／神嘗祭遙拝  
中旬 抜穂祭  
二十五日 軍艦瑞鶴慰霊祭
- 十一月 三日 明治祭／石州流献茶式  
二十三日 新嘗祭  
二十九日 大絵馬掛け替え  
三十日 大絵馬奉納奉告清祓
- 十二月 二十三日 天長祭／神御衣御料奉納奉告祭  
二十八日 煤祓神事  
三十一日 神符清祓／歳末大祓／除夜祭
- 一月 一日 初太鼓／歳旦祭／新春初祈禱  
二日 長山稻荷社歳旦祭  
三日 元始祭  
五日 書き初め大会〈奈良地区大会〉  
六日 書き初め大会〈大阪地区大会〉  
七日 昭和天皇祭遙拝  
中旬 古神札焚上げ奉告祭  
二十日 神武講社新穀奉獻感謝祭
- 二月 二日 長山稻荷社神符遷霊祭  
十一日 紀元祭  
十七日 祈年祭
- 三月 初午の日 長山稻荷社初午祭  
春分の日 春季皇霊祭遙拝

毎月一日・十一日・二十一日は月次祭を齋行。  
※御参列を御希望の方はお問い合わせ下さい。

橿原神宮宝物館

特別展「伊勢の御神宝と橿原の刀剣」



明治天皇御奉納太刀



金銅装頭椎太刀

橿原神宮宝物館では今秋十一月に特別展「伊勢の御神宝と橿原の刀剣」を開催致します。文化継承のため伊勢の神宮より下附された御神宝と橿原神宮で所蔵する刀剣類を展示致します。伊勢の御神宝は二十一年に一度式年遷宮の度に、全て新調されます。式年遷宮で用意される御神宝は、當代きつての名工の手により調製され、新宮に奉安されます。

この度の展示では、下附された御神宝「御太刀」「御鉾」「御櫛」「御弓」の四点全てを展示致します。御神宝を調製した当代一流の名工たちの技を御覧戴ける貴重な機会です。御来宮の際には、是非お立ち寄り下さい。

橿原神宮宝物館  
〈開館時間〉午前九時～午後四時  
土・日・祝休日 開館(平日は要予約)  
〈入館料〉大人・三百円／中・高・大学生…二百円 ※小学生以下は無料

※内容詳細は随時橿原神宮ウェブサイトにて御案内致します。